

【学力向上フロンティアスクール中間報告書様式】(小学校用)

| | |
|-------|-----|
| 都道府県名 | 神奈川 |
|-------|-----|

I 学校の概要 (平成15年4月現在)

| | | | | | | | | | |
|-----|-----------|-----|-----|-----|----|----|------|-----|-----|
| 学校名 | 横浜市立豊岡小学校 | | | | | | | | |
| 学 年 | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 | 5年 | 6年 | 特殊学級 | 計 | 教員数 |
| 学級数 | 3 | 3 | 3 | 3 | 2 | 3 | 2 | 19 | 24 |
| 児童数 | 93 | 116 | 105 | 100 | 66 | 96 | 9 | 585 | |

II 研究の概要

1. 研究主題

一人ひとりの生き方を切り拓く学びの創造
 ～個に応じて確かな学力の向上を図る学習指導の工夫～
 主に算数科の少人数指導を通して

2. 研究内容与方法

(1)実施学年・教科

・個別支援学級、1～6年生の算数
 習熟の程度に応じた指導が効果的な教科であるため

(2)年次ごとの計画

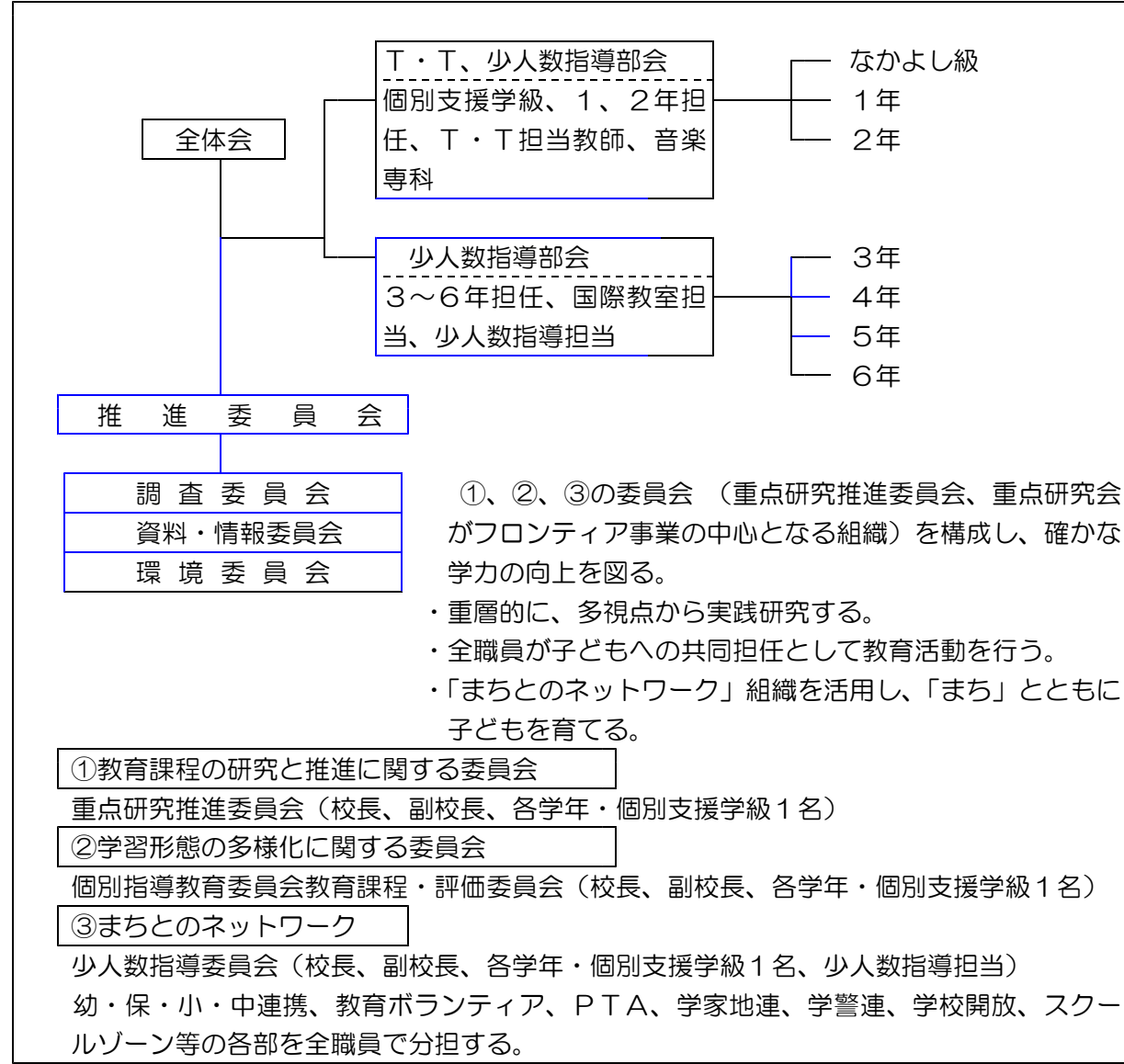
| | |
|--------|--|
| 平成14年度 | ○テーマ 個に応じて確かな学力の向上を図る学習指導の工夫 ～主に算数科の少人数指導を通して～ |
| | ○仮説 算数科で少人数指導を取り入れ、教材開発、指導形態、指導法の改善を図ることによって、一人ひとりの子どもが自ら進んで学び、学ぶ意味や喜びを味わうことを通して、確かな学力の向上を図ることができるだろう。 |
| | ○研究内容・方法 確かな学力の向上を目指して低学年の算数のT・Tと3～6年の算数の少人数指導による習熟度別、課題別の指導法の改善、教材の開発。授業研究会を通して実践研究を充実させ、個に応じて確かな学力向上を図る。実践研究を横浜市に発信し、子どものよりよい学びを追究する。 |

| | |
|--------|--|
| 平成15年度 | ○テーマ 個に応じて確かな学力の向上を図る学習指導の工夫 ～主に算数科の少人数指導を通して～ |
| | ○仮説 少人数指導を取り入れた算数科で、教材開発、指導形態、指導法の改善を一層図ることによって、一人ひとりの子どもが自ら進んで学び、学ぶ意味や喜びを味わいながら、確か |

| | |
|--------|--|
| 平成15年度 | <p>な学力の向上を図ることができ、主体的に学ぶ子が育つだろう。</p> <p>○研究内容・方法</p> <p>算数を中心にT・Tと少人数指導の研究を深める。複線化カリキュラムⅠ（試案）の作成。豊岡タイム（カリキュラム外）の学習活動のあり方を追究する。</p> <p>中間発表（1/22）をし、子どもの豊かな学びを追究する。</p> |
|--------|--|

| | |
|--------|---|
| 平成16年度 | <p>○テーマ</p> <p>個に応じて確かな学力の向上を図る算数科の学習指導の工夫 ～数学的な考え方や表現力を育てることをめざして～</p> <p>○仮説</p> <p>少人数指導を取り入れた算数科で、教材開発、指導形態、指導法の改善を一層図ることによって、一人ひとりの子どもが自ら進んで学び、学ぶ意味や喜びを味わいながら、確かな学力の向上を図ることができ、主体的に学ぶ子が育つだろう。</p> <p>○研究内容・方法</p> <p>算数科においてT・Tと少人数指導の「学習指導の工夫」の研究を深め、まとめる。複線化カリキュラムⅡ（試案）の作成をする。</p> <p>まとめの発表をする。</p> |
|--------|---|

(3) 研究推進体制



Ⅲ 平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

①領域・内容面

「数と計算」や「量と測定」「図形」などの領域において数学的な考えを培うことを課題として取り組んできた結果、算数を活かす場面や算数をつくり出す場面などで数学的な考え方が育ってきていると考えられる。発展的な学習では、数量や図形についての意味が実感的に捉えられるようになったり、数学的な考えや技能を活かすことでその価値や必要性を感じられるようになったりした。標準・基礎的な学習では、公式化や計算の内容のところで既習の内容に新たなものを作り上げる学習を通して、工夫したり、考えたり、説明したりして数学的な考えの定着を図ることができた。

②学力の観点

「学ぶ意欲」の観点では、算数のコース別の授業やT・Tの授業を心待ちにし、新しい問題に対して真剣な取り組みが見られることから、意欲が十分だと感じさせてくれることが多くなった。

また、どのようにして解こうか思索し、自分の考えを図や言葉や式で表したり、説明したりすることが前よりも得意になり、当たり前のこととして取り組む子どもが増えてきた。教師が考えているよりも多様に考えている様子を見るにつけ、「思考力」も増していると考えられる。

③練り上げの仕方の工夫

練り上げの仕方の工夫として、いくつかの方法が一般的になってきた。

- ・紙に書いて考えを発表するが、考えでよく似たものや共通する考えを黒板の上で、移動して近くにまとめ、考えの共通性を明らかにする。
- ・つまずいた考えもどのようにすればできるかを考え、できた喜びを多くの子どもに味わわせていく。
- ・小さなまとめ、何回も出てくる大事な考えを学習のまとめに生かす。
- ・なるべく子ども自身の言葉でまとめができるようにする。
- ・公式化、一般化を急ぎ過ぎず、複数の事例を学習してから行う。
- ・大事な考えを練習問題等で使ってよさを味わう。

④方法論としての自己評価(子ども)

「算数日記」は、自分の学びを振り返る手段として定着してきている。内容としては、「分かったこと、疑問に思ったこと、心に残ったこと、取り組みたいこと」などであったが、芯をついているものも多く見られた。疑問に思ったことや分かったことの内容が浅いものであれば授業内容が子ども達に浸透したのかを振り返るきっかけともなり、その点で教師にとって十分参考になるものであった。

⑤指導と評価の一体化・・・評価(教師)

各コースの担当者は学級から集まってきた子ども達の指導をし、評価を行っている。その内容としては、各コースでどのようなことでできた喜びを味わい、どのようなことで成長したのか、またどのようなことでつまずきをみせたのかを評価表にまずメモして名簿に記入し、各担任に知らせるという一連の流れができた。毎時間の子ども自身の評価(算数日記)と教師の評価とをあわせてみることにより、コース担当者は次時の指導の組み立てと改善を図ることができた。

⑥カリキュラムの複線化

子どもの学習状況を3段階に想定して捉え、習熟度別学習を進めているとコース別の個に合わせる事がかなりできるようになった。

基礎コース・・・基礎・基本の確実な定着を図るために、「既習の補充を必要に応じて取り入れ

る。問題の数値を簡単なものにする。場面をイメージできるように問題文を何人かが一人ずつ読む。具体物を使った活動を取り入れる。どの子も体験する。練習問題をする。」などの内容を織り込んだ。

標準コース・・・計算そのものはできるが、意味理解が不十分な子ども達の理解を確実にするために「問題の数値は教科書程度とする。演算決定や計算の意味理解を確実に進行。線分図や数直線、あるいは、(半)具対物を使った活動を取り入れる。まとめは話し合いの中から行う。練習問題をする。」などの内容を織り込んだ。

発展コース・・・基礎・基本の確実な定着とその発展を図るために「問題の数値は少し大きくする。数直線を自分でかいて、友達に説明できる。式を読んだり、問題づくりをしたりする。まとめは進んで行く。よさを味わう。」などの内容を織り込んだ。指導計画を作るための教材研究が今までより深まり、教材開発、指導法の改善が進んできた。その結果を「複線化カリキュラム集1(試案)」としてまとめることができた。

⑦ その他

子どもの意識、教師の意識、保護者の意識が変わってきており、個に応じる少人数指導を進めてきたことのよさを子ども、保護者、教師が実感している。

- ・学年や担当教師間で子どもの学びをよくするための話題が増え、学年共同担任という姿勢で子どもを見取るようになった。
- ・学習状況が同じ程度であったり、課題意識が同じであったりする子どもが集まっているので、分からないことが「分からない。」と本音でもの言えるようになり、本気で分かろうとする努力をするようになった。

2. 今後の課題

①領域・内容面

表現・処理の力があまり上昇しない子どもも見られるが、引き続き指導にあたりたい。考え方のよさやアイディアは日頃の授業の中で折りにふれて扱い、培っていききたい。

②学力の観点

「表現力」については、自分の考えや思いを話せるようにするとともに、かくことでも図や数直線や文章などに表現して他の人に分かってもらえるようにさせていきたい。話し合いが十分なされないとまとめが表面的なものになってしまうこともあるので、話し合いの仕方を工夫していくとともに時間を確保して練り上げの場面に入るようにしていきたい。

③練り上げの仕方の工夫

子どものなかには、分かった、楽しかったなど表面的なものに終わることもあるので、「何が分かったのか。」「何が楽しかったのか。」を詳しく書くように今後とも指導していきたい。

④方法論としての自己評価(子ども)

子どものなかには、分かった、楽しかったなど表面的なものに終わることもあるので、「何が分かったのか。」「何が楽しかったのか。」を詳しく書くように今後とも指導していきたい。

⑤指導と評価の一体化・・・評価(教師)

単

元毎のコース別の評価については確実にできて簡便なものを考えていきたい。まずは、「名簿のサイズをA4にそろえる、縦線は濃すぎず文が書けるようなものにする」などから取り組みたい。

⑥カリキュラムの複線化

コース間の担当教師の話し合いを密にして教材研究の質を高め、残された単元の複線化カリキュラムづくりを進め、「複線化カリキュラム集2」としてまとめる。

⑦ その他

・(学級数+1で学級を解体して行っている)少人数学習というクラスの授業よりかなり人数が少ないと考えがちだが、そうならないこともある。同じ程度の学習状況や同じ課題意識をもった子どもに、よりきめ細かな個に応じる指導をしているということを保護者や地域に対しても学年便りや学校便りで啓発していくようにしたい。

IV 学力等把握のための学校としての取組

保護者や児童には少人数指導に対するアンケートを取った。児童の学力把握のためには、横浜市標準学力診断検査を2年間に渡り継続観察した結果の分析をし、学力の把握をすることができた。
横浜市標準学力診断検査は毎年4月末実施

V フロントアスクールとしての研究成果の普及

平成16年1月22日(木)に全国に向けて研究発表会を開催した。北海道から九州までの430人以上の先生方に本校で考えている「主に算数科における少人数指導のあり方」を発信することができた。教師全員による習熟度別授業や課題選択学習の授業を参観の後、全体会では研究の概要の説明、文科省視学官の根本博先生によるご講演「中央教育審議会の答申と学習指導要領の見直し～『個に応じた指導』の改善をめざして～」を聴いてもらうことができた。各学年部会の講師による講演も初の試みで参加者にとっても学習する機会が多く勉強になったのではないかと思う。成果物としての研究紀要、学習指導案、複線化カリキュラム試案(個別支援学級、1～2年)、(3～6年)を全員に配り、広く啓発することができた。

次の項目ごとに、該当する個所をチェックすること。(複数チェック)

- | | | | | |
|----------------------|-------------|-----|-------------|----|
| 【新規校・継続校】 | 1 5年度からの新規校 | ▽ | 1 4年度からの継続校 | |
| 【学校規模】 | 6学級以下 | | 7～12学級 | |
| | 13～18学級 | ▽ | 19～24学級 | |
| | 25学級以上 | | | |
| 【指導体制】 | ▽少人数指導 | ▽ | T・Tによる指導 | |
| | 一部教科担任制 | | その他 | |
| 【研究教科】 | 国語 | 社会 | ▽算数 | 理科 |
| | 生活 | 音楽 | 図画工作 | 家庭 |
| | 体育 | その他 | | |
| 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 | | ▽ | 有 | 無 |